

国連常任理事国の資格も品格もない中国  
剥き出しの大国・戦勝国意識を糾弾する！

2013.10.22 (火) [山下輝男](#)

## 1 はじめに

「日本は、第2次大戦後の国際秩序を認め、挑戦すべきではない云々」との中国の駐米大使の発言などは、菅義偉官房長官の発言にあるとおり論評するに値しないとは思いますが、あまりにも酷すぎる。

彼らの底意には日本に勝利したのだ、敗戦国は戦勝国に従うべきであるとの剥き出しの大国・戦勝国意識がある。その意識が尖閣問題などに表れている。中国は、現在は確かに大国かもしれないが、彼の国が日本に勝利したなどと事実誤認も甚だしい。

## 2 中国の露呈した戦勝国意識の数々！

セシル・ヘイニー米太平洋艦隊司令官（左）と中国の崔天凱駐米大使。米ハワイのヒッカム空軍基地で（2013年9月6日撮影、資料写真）[\[AFPBB News\]](#)

論評するに値しないとはいえ、中国の歴史誤認はあまりにも酷すぎる。無視することは容易だが、無視すれば、それが事実として独り歩きを始める恐れもあり、事実を確認しておきたい。また、管見ながら最近露わになり始めた戦勝国意識を考察したい。

### (1) 中国の駐米大使の論評するに値しない発言

10月10日付読売新聞によれば、中国の崔天凱・駐米大使は8日、ワシントン市内で講演し、第2次世界大戦の勝利は中国や米国を含む連合国の人々のものとした上で、「日本の政治家はこれが第2次世界大戦後の国際秩序だと認めるべきだ。これに挑戦してはならない」と主張した。

崔氏は、「日本の一部の政治家は、米国に2発の原子力爆弾を投下されたから第2次世界大戦で負けたと思い込んでいる。だから、米国の反発さえ買わなければ何をやってもよく、他の国々の懸念を気にかける必要はないと信じている」とも語った。

これに対して、我が国の官房長官は、論評するに値しないときき下ろしたが、当然だ。これが一国を代表する大使の認識なのである。

これ以外にも、同日夕、ブルネイで、李克強中国首相は、南シナ海の島々の領有権を巡る問題について、「争っていない他の国は介入すべきではない」と恫喝とも取れる強面発言をした。

これらは、剥き出しの大国意識、第2次大戦勝利者意識そのものだ。

### (2) 抗日戦争勝利記念式典の開催

昭和 20 年 9 月 2 日、「降伏文書調印に関する詔書」が発せられ、これに基づき、同日、東京湾上の米戦艦ミズーリにおいて、日本側を代表して重光葵外相、梅津美治郎参謀総長、連合国を代表して連合国最高司令官のマッカーサーが降伏文書に署名した。

対日戦勝記念日は、通常は、日本政府が公式に降伏文書に調印した 1945 年 9 月 2 日を指すことが多いが、中国などの対日戦勝記念日は、その翌日 9 月 3 日である。これは中華民国政府が 9 月 3 日から 3 日間を対日戦勝利の休暇としたためであると言われている。

中国では、この日は関連する各種のイベントが企画されるのが通常である。中国外交部の報道官は 3 日、抗日戦争勝利 68 周年を記念して談話を発表し、「3 日は中国人民抗日戦争勝利 68 周年でもあり、(中略) 正義が悪に勝ち、光が闇に勝ち、進歩が反動に勝った偉大な勝利である」と述べた。

いかにも中国が主体となって対日戦に勝利したかのように聞こえるが小生の僻みか？いずれの国も戦勝記念日を祝うことはあるが、それは静かに行うべき性質のものだ。

### (3) 荒唐無稽な抗日戦争ドラマの数々

米メディアによれば、中国では抗日をテーマにした映画やドラマが年に 200 本も製作されているという。愛国心の高揚には効果があるのだろうが、その内容たるや荒唐無稽、奇妙奇天烈なものが多いという。

中国人の美人スパイが弓矢で日本兵をバタバタと殺し、素手で日本兵を引き裂くカンフーの達人が登場したり、小刀で日本の砲弾を爆発させたり、ゲリラ部隊が乗った車が空を飛んだりとまさに劇画漫画の世界である。

非常識もここまでくれば大したものである。最近の反日暴動を見れば、国民なかんづく子供たちに対する刷り込みは奏功しているようだ。

もっとも最近では行き過ぎた娯楽化の反省がなされているようではあるが・・・それは、十分に国民に対する愛国反日教育がなされたと判断したからなのかどうかは分からない。

### (4) 愛国教育テーマパーク「抗日戦争記念館」

1937 (昭和 12) 年 7 月 7 日、北京市郊外盧溝橋で満州事変の発端となる盧溝橋事件が勃発した。その盧溝橋近くに、一大抗日メモリアルゾーンがある。

盧溝橋事件から 50 周年の 1987 年 7 月 6 日に開設され、2 期工事が 1997 年に完成した。

展示は、「総合庁」「日軍暴行庁」「人民戦争庁」「抗日英烈庁」の 4 つであり、展示品の解説は中国語と日本語である由。

日本軍の虐殺状況をこれでもかというほど見せつけるようになっている。「日本人はひどい民族だろう」と強迫してくるという。

## (5) ロシアまで巻き込む習近平の思惑 (2015 年第 2 次大戦勝利記念行事開催)

去る 10 月 7 日、APEC (アジア太平洋経済協力) が開かれているインドネシア・バリ島で中国の習近平国家主席とウラジーミル・プーチン露大統領は首脳会談を行った。両首脳は、第 2 次世界大戦での勝利から 70 周年を迎える 2015 年に記念行事を行うことで一致したと報ぜられた。

ロシアは対日交渉のカードを得たいとの思惑があったのだろうし、中国は、対日戦に勝利したのだとのメッセージを国内外に発信し、日本を弱気に挫こうとする狙いだらう。誤った事実も百回千回言い募ればそれが真実らしく聞こえてくる、心理戦に長けた国ならではのである。

### 2 事実はどうか！

#### (1) 中国は日本軍に勝利したのか？ 歴史的な事実は

対日講和条約に署名したという観点からは、中華民国が日本に勝利したというのは正しいが、作戦や戦闘において、中国軍が日本軍に勝利したのは、局地戦において数えるほどしかない。

巷間日中戦争と言われる満州事変から支那事変そして大東亜戦争に至る支那大陸における 8 年間の両軍の戦いにおいて中国軍は日本軍の相手ではなかった。

(“日中戦争” との用語は日本として正式に決定したものではない。何時頃、誰が使い始めたのだろうか?)

しかも、日本軍が主敵として戦ったのは蒋介石率いる中華民国軍であり、当時八路軍と呼ばれた中国共産党が指導する共産軍は日本軍の姿を見かけると逃げ出すとまで言われていた。

中国軍が勝利した戦史である拉孟・騰越 (ラモウ・トウエツ) の戦いですら援蒋ルート遮断のため派遣された日本軍の小部隊に対して、米・中雲南遠征軍が数十倍する戦力 (拉孟守備隊 113 歩兵連隊の 1260 人が、中国軍 4 万 8000 人の猛攻を 100 日間防いだ後玉砕。桁数の誤りではないので、念のため) で攻撃し、孤立した日本軍部隊は、玉砕するに至った。

この作戦に、中共軍は参加していない。これくらいの戦力差がないと日本軍に立ち向かえなかったのだ。

ほかにいくつか日本軍が敗退した作戦があるが、それらはいずれも中国軍によるもので中共軍に痛い目に遭わされたのは、日本軍の補給部隊が伏撃に遭った作戦ぐらいだ。

中国軍も中共軍も決戦を回避し、戦力を温存し、日本軍を奔命に疲れさせる作戦を行った。圧倒的な戦力格差から、中国側としてはそうせざるを得なかったのは致し方ないが、日本としては抜きたくとも抜けない泥沼から抜け出せもせず、遂に敗戦の憂き目に遭った。

中国 (支那) 大陸からの撤兵を遂に決断できぬままであったのが悔やまれる。(「支那」を蔑称と言うなら、CHINA も使用すべきではないだらう)

## (2) 中国の常任理事国としての正当性は？

国際連合は、UNITED NATIONS であり、本来の意味では連合軍である。第2次大戦において日独伊枢軸国と戦って勝利した連合軍の意であり、日本人が抱く平和的なイメージとは異なる。その主任務は、国際平和の維持である。

さて、国連の安保理常任理事国は、核クラブとも称され、P5 として拒否権を有している。

米英仏に加え、ロシアと中国が現在の常任理事国である（なお、参考までに、国連憲章 23 条では、今でも中華民国を常任理事国としている）。

そもそも、国連発足時、常任理事国を選定する際、英国のウィンストン・チャーチル首相は、（連合軍の勝利に何ら貢献していない）中華民国の常任理事国入りに否定的であったが、米国のフランクリン・ルーズベルト大統領が中国の大国化を見越して常任理事国入りを推進したとも言われている。チャーチルの判断は真つ当だったと思うのだが・・・。

国連発足後、支那大陸では蒋介石の中華民国軍と毛沢東率いる共産軍の覇権争いが激化し、敗れた蒋介石は台湾に逃れ、戦いに勝利した毛沢東は 1949 年に中華人民共和国を樹立し、その後国連に加盟した。

1971 年の「国府追放・中国招請」のアルバニア決議により、中国の代表権が中華民国から中華人民共和国へ変更された。一方、決議の投票では不利であると見越した蒋介石は、自ら国連を脱退した。米国の思惑が中共の常任理事国入りを可能にしたのであり、何時も振り回される。

中共にとってみれば、支那大陸を実効支配し、蒋介石は台湾に逼塞しているのであり、常任理事国入りは当然であるとの思いが強かったと思う。

力により蒋介石を追放したからこそその常任理事国入りであり、力こそ正義であるとの信奉者になったとしても不思議ではない。力による現状変更を是とする原点である。

朝鮮戦争においては、中国人民解放軍は、義勇軍として北朝鮮を支援し、国連軍に対してなのであるが、そのような国でも常任理事国たり得るのか？

## (3) 常任理事国たるの責務を果たしているのか？

日本は確かに先の大戦において壊滅的な敗北を喫したし、支那大陸で中国人民に対し計り知れない被害をもたらしたし、苦痛を与えたことは事実であり、それは真摯に反省すべきである。

戦争だったからやむを得ないのだと免罪にすべきではないだろう。しかしながら、新生日本は自由と民主主義に基づく近代国家として発展し、国際平和にも貢献してきた。

一方、我が国に対して、いつまでも敗戦国であることを忘れるべきでないと執拗に繰り返す中国は、国際社会の平和に貢献すべき常任理事国として、その責務に相応しい仕事をし、品格を有しているのだろうか？

図体や軍事力だけで大国と言うのではない。それにふさわしい国家の品格が求められる。トラブルメーカーにすらなっているのではないか！

品格泣き国家は常任理事国を辞すべきだ。

## 3 日本への対応などについて

### (1) 反論をすべし！

日本の対応はどちらかと言えば、「言われっ放し」である。「論評するに値しない！」と無視し、一刀両断に切ってしまうのは簡単だが、反論しないということは認めた証左と見なされる恐れがある。

やはり言うべきは主張しなければならない。正々堂々と我が国の立場、考えを述べるとともに世界に発信すべきだ。彼らに言うべし「歴史を直視せよ」と。剥き出しの大国意識は毛嫌いされて当然だ。

### (2) 歴史共同研究のような愚策は止めるべし！

我が国は、真摯に歴史を共同研究しようという態度であっても、彼らは政治的プロパガンダの場にすべく狂奔し、彼らの主張を唯一の正論として、決して自国の非を認めることはない。

歴史の共同研究は純然たる学術的なものではなく、それは政治ショーでもある。結局日・中の歴史共同研究は下策に過ぎなかった。日韓とて同じだ。条件が整っていない。

### (3) 日本も常任理事国を目指し、国連改革に乗り出せ！

日本には無邪気な国連至上主義がいまだにあるようだ。それはさておき、国連改革には敵国条項など、いくつかの論点があるが、その第一は安保理の常任理事国の拡大問題である。日本はその資格と能力があると思えるのだが、中国の過敏な反対でその夢は果たされないだろう。

安倍晋三首相が国連総会で一般討論演説を行い、安全保障理事会の常任理事国入りに意欲を示したことについて、中国外務省の報道官は「第2次世界大戦の勝利の成果に挑戦することはできない」と述べ、反対する中国政府の立場を改めて強調した。

ネットの世界でも国連解散論など過激な書き込みが続出している。

国連を巡る環境は、設立当初に比較すれば様変わりしている。その状況に合わせるべきである。にもかかわらず、第2次大戦の連合国にこだわる中国は、「常任理事国は、アジアに1つで十分であるという現代版華夷秩序」を信奉しているのだろう。

世界は変わったのである。それに合わせるべきだ。安保理も変わらなければならない。

## 4 おわりに

本稿において、ヘイトスピーチを行う気は毛頭ない。ただ、事実は事実として明確にしておきたいだけだ。

米英などの連合国には確かに負けたが、日本は中国に果たして負けたのか？

彼らが連合国の一員である限りにおいては負けたと言えるが、“勝った、勝った”と声高に叫ばれると異議を挟まざるを得ない。